

子ども主体の学級経営を通して 明確な目標意識と自信を育てる

岐阜県 中津川市立西小学校

以前は、自分に自信が持てず、友だちとのかわりが弱いため、言葉よりも先に手が出てしまう子どもが見られたという中津川市立西小学校。2010年度から、話し合い活動を充実させるなど学級経営のあり方を見直し、友だちと協力しながら、明確な目標を持って主体的に動ける子どもの育成を図っている。

取り組みのねらい

- 自分に自信を持って何事にも頑張れる子どもを育てる
- 友だちの意見を聞いて、自分の考えを表現できるようにする
- 友だちの問題に気付いて、話し合いで解決する姿勢を育む

取り組みの内容

- 学年目標や学級目標を意識させ、行事や日常生活に前向きに取り組ませる
- 話し合い活動を充実させて、自分たちで活動内容を決めさせる

取り組みの成果

- 子どもが自分の成長を実感し、自信を付けた
- 話し合いの大切さを理解し、自然に話し合えるようになった
- 教師の意識が変わり、子どもを前向きにするさまざまな工夫をするようになった

S c h o o l D a t a

◎1941(昭和16)年開校。教育目標は、「豊かな心で学び合い、鍛え合う子どもを育てる」。2010年度から2年間、東濃地区教育推進協議会および中津川市教育委員会の研究指定校となる。



校長 林 茂雄先生

児童数 636人 学級数 21学級(うち特別支援学級3)

所在地 〒508-0011 岐阜県中津川市駒場301-1

TEL 0573-66-1355

公開研究会 未定

● 取り組みのねらい

学級経営を見つめ直し 子どもの自尊心の向上を図る

自尊感情が低く、自分の考えに基づいて行動する力が弱い——。取り組みを始める前、中津川市立西小学校の教師が感じていた課題だ。教務主任の浅野和久先生は次のように話す。

「本校の子どもたちの自尊心の低さは、校内で実施した調査でも明らかになっていました。自分の考えをしっかりと持てないために、友だちとのかわりの中で、率直に意見を言い合い、考えを深めていく場面があまり見ら

授業で高める自己肯定感

図1 発達段階に応じた「中心となる活動」

特別支援	他者を意識する
仲間と協力しながら他者を意識した活動をする	
低学年	仲良く助け合う
自分や仲間のよさに気付き、助け合える活動を工夫する	
中学年	協力し合う
学年・学級目標を達成する活動を話し合っ決めて、実行して成果を認め合う	
高学年	信頼し支え合う
リーダーシップを発揮する活動や、充実感・連帯感が育つ活動を、学年、全校、地域へと広げていく	

学年目標や学級目標を具現化できる活動内容とし、1回の行事だけでなく、繰り返し継続して、活動を徐々に発展させるよう心掛けている
*同校の資料を基に編集部で作成

「仲間を信頼して認め合うと共に、高学年としてふさわしいリーダーシップを身に付けることをねらいとして活動を進めています」
行事を中心とした「イベントチャレンジ」では、「米作り」「キャンプ」「ペア活動（3年生との縦割り活動）」「掲示」「6年生（6年生を送る会の企画・運営など）」「社会見学」の6つのプロジェクトを設定。5年生全員が3学級混合でいずれか

「とにかく全員がリーダーを経験することがポイントです。皆をまとめる大変さなどを体験すると、自分がリーダーではないプロジェクトにも率先して協力しようという気持ちが生まれます」（佐々木先生）

「とにかく全員がリーダーを経験することがポイントです。皆をまとめる大変さなどを体験すると、自分がリーダーではないプロジェクトにも率先して協力しようという気持ちが生まれます」（佐々木先生）

プロジェクトに属し、そのプロジェクトに属した全員がリーダーとして活動を引っ張っていく。

取り組みの柱は、「『中心となる活動』の工夫」と『話し合い活動』の工夫の2つだ。「中心となる活動」では、学校行事へのかかわり

「怒（思いやり）の心を忘れず、子どもや教職員、保護者（地域住民）、関係機関の方々に接する」

「楽しい授業や学校づくりを心掛ける。子どもを全面的に否定も肯定もしないように接する」

「思いやりがあり相手の気持ちに分かる、そして徹底的に頑張っている壁を乗り越えられる子どもを育てたい」

「思いやりがあり相手の気持ちに分かる、そして徹底的に頑張っている壁を乗り越えられる子どもを育てたい」

「怒（思いやり）の心を忘れず、子どもや教職員、保護者（地域住民）、関係機関の方々に接する」

や生活上の諸問題の解決を通し、子どもが発達段階に応じて学年目標を達成することを目指す（図1）。

「学校行事は、目標に向けて集団で頑張る力を育てるのに適しています。しかし、行事だけでは、開催時期の間隔が開いて、子どもの気持ちが続かないので、日常生活でも目標を明確に意識し、頑張れるようにしています」（浅野先生）

「楽しい授業や学校づくりを心掛ける。子どもを全面的に否定も肯定もしないように接する」

「思いやりがあり相手の気持ちに分かる、そして徹底的に頑張っている壁を乗り越えられる子どもを育てたい」

「思いやりがあり相手の気持ちに分かる、そして徹底的に頑張っている壁を乗り越えられる子どもを育てたい」

● 取り組みの内容

自分たちで決めることで自主的な気持ちも育つ

高学年を中心に、12年度の具体的な活動を見ていこう。5年生の学年目標は、「チャレンジ高学年くしたいことよりも、するとよいことが進んでできる仲間」だった。5



中津川市立西小学校
佐々木宏文 ささき ひろふみ
研究副主任。5学年担任。「熱い気持ちを抱き、何事にも手を抜かずに取り組める子どもを育てたい」



中津川市立西小学校
町野代央子 まちの ようこ
研究主任。6学年担任。「こんなことを教えてもらった」などと、子どもの記憶に残る教師になりたい」



中津川市立西小学校
浅野和久 あさの かずひさ
教務主任。「思いやりがあり相手の気持ちに分かる、そして徹底的に頑張っている壁を乗り越えられる子どもを育てたい」



中津川市立西小学校教頭
田野武彦 たの たけひこ
「楽しい授業や学校づくりを心掛ける。子どもを全面的に否定も肯定もしないように接する」



中津川市立西小学校校長
林茂雄 はやし しげお
「怒（思いやり）の心を忘れず、子どもや教職員、保護者（地域住民）、関係機関の方々に接する」

*プロフィールは2013年3月時点のものです



写真 行事や生活にかかわる活動について時系列（左から右）に掲示し、どれだけ目標に近付けたかをビニールテープの矢印の高さで示している。矢印の位置は教師と子どもが相談して決める。具体的な成果が見えやすく、子どもが自信を深めやすい

この活動を通し、子どもにリーダーとしての責任感が育っていくのが手に取るようになるかと、佐々木先生は言う。

「普段はおとなしい子がキャンペーンのリーダーになったのですが、『自分が率先して大きな声を出さなければ、誰も動かない』と気付けて頑張っていました。また、活動を盛り上げようと、休み時間に自発的に動く子どもも少なくありません」

また、子どもの気持ちを前向きにする工夫も取り入れている。例えば、教室の後ろの壁に、目標に対する子どもの気持ちや成果を示す矢印を掲示している（写真）。子どもの頑

図2 「にしこう活動」しっかり掃除チェック表

『にしこう活動』しっかり掃除 チェック表

組 G 掃除場所

掃除(生活)リーダー【 】

◎実行委員で「しっかり掃除」をするために大切なことを3つ決めました。
それそれぞれを達成するためにどうしたら良いかめあてを決めて取り組みましょう。

①すみずみまで ②時間いっぱい ③私語なく

掃除(生活)リーダーが
○△×でチェック

名前	分組	めあて	月	火	水	木	金
		①					
		②					
		③					

『にしこう活動』しっかり掃除チェック表』には、自分でめあてを決めて書き込み、毎日、自分でチェックする。グループごとに1枚に書き込むことで、友だちの目標や達成状況も分かり、刺激となっている *同校の資料をそのまま掲載

張りに合わせて、矢印が上下するので、私たちの頑張りを振り返るきっかけになっているという。

6年生の学年目標は、「真・信・伸（しん・しん・しん）。「学校の顔」として、行事や学校生活において全校児童の見本になるような姿勢や態度を育てている。

例えば、清掃活動では、一人ひとりが毎週、「自分の仕事が終わったら『見付け掃除』をする」「隅のほこりまで取る」など、具体的な「めあて」を決め、毎日、チェックシートに達成の度合いを3段階で評価する（図2）。研究主任で6学年担任の町野代央子先生は、

次のように説明する。

「めあてを決めてチェックすることで、目的意識が明確になって真剣に取り組むようになりました。きれいになった状態を見たり、教師や他の子どもから褒められたりすると、『頑張った』という達成感が得られて自信につながります」

こうした「中心となる活動」をより充実させるための土台となるのが、校内研究のもう1つの柱である「話し合い活動」だ。例えば、6年生では、清掃活動への取り組み方を事前に学級会で話し合う。教師が「こうしなさい」と言うのではなく、自分たちで決めることによつて、一人ひとりが「自分のこと」として取り組むようになる。

「話し合いでは、課題を解決するというより、よいところを更に伸ばせるように促しています。清掃に関する話し合いなら、最初に『○○さんがしっかりと拭いていた』『○○くんが時間通りに終っていた』とそれぞれよいところを出し合います。すると、子どもたちの自己肯定感が高まり、『もつとよくするために』という話し合いがスムーズに進みます。よいところが伸びると、自然と課題も解決されるものです」（浅野先生）

子どもを肯定する言葉が見付からないのは教師の力不足

こうした活動以外にも、日頃から子どもを

授業で高める自己肯定感

認め、自己肯定感を伸ばすことを心掛けている。町野先生は、子どもは授業中の発表がうまくいくと自信を持ちやすいことを実感した。そこで、まずノートに書いてから発表させたり、「明日、これを質問するから考えてきて」と事前に考えさせたりして、発表がうまくできるようにしている。林茂雄校長は次のように話す。

「子どもは『認めて、褒めて、励ます』ことによって前向きな気持ちになります。始めから厳しいことを言われたら、意欲を失ってしまうのは当然です。肯定する言葉が見付からないのは教師の準備不足だと、私は考えています」

集会や給食時の放送などでは、校長や教頭が子どもに言葉を掛けるようにしていると、田野武彦教頭は言う。

「子どもが良いことをしたり、地域の方から褒められたりしたことは、積極的に取り上げて全校に広げています。教育の基盤は愛情です。愛情を込めた言葉によって『自分が認められた』という思いが積み重なり、子どもは成長していくのだと思います」

● 取り組みの成果

子どもが自身の成長を実感し
授業を受ける姿勢も変化

子どもが自分の成長を実感し、「自分も出来る」といった自信を深めるにしたがって、

さまざまな変化が表れている。

「私が赴任した6年前は、集会では子どもたちが騒がしく、人の話を聞く姿勢に課題がありました。今は集中して聞いています。また、相手の話をしっかりと聞いて会話するようになりました」(浅野先生)

子ども同士が衝突した時、力による問題解決ではなく、まずは話し合うという雰囲気も生まれている。話し合いの大切さを理解して、教師に「話し合いの時間をください」と言うてくる子どももいるという。

こうした変化は、授業を受ける姿勢にも好影響をもたらしている。

「相手が自分を受け止めてくれるという安心感が芽生え、自分たちの思いを出し合って自然に話し合えるようになりました。以前に比べ、挙手する子どももかなり増えました」(町野先生)

教師の意識も大きく変化した。

「一連の取り組みを通して、子どもは自分たちが話し合って決めたことには納得して自主的に動くことを実感しました。『子どもの見方が大きく変わった』と話すベテラン教師もいます」(林校長)

今後の課題は、自己肯定感と学ぶ意欲との関係をより明らかにしていくことだという。同校は、今後も授業や日々の学校生活を通じた指導の工夫に取り組み、子どもの成長を促していきたい考えだ。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師に対し、ビジョンや方針を明確に示すことが校長の役割と考えています。分かりやすく伝えるために、どのような子どもを育てたいかなど、具体的に語り掛けるように努めています。研究を推進する上では、教師の頑張りを認め、励ますことが欠かせません。そこで「地域からこのようなうれしい言葉をいただいた」などと実践の価値付けをした上で、「もっとこうしていこう」と次なる方向性を指し示すようにしています。

校長 林茂雄先生

ミドルリーダーの役割

良い実践や子どもの姿を校内に広めていくことを大切にしています。また、授業の進め方や研究について研究主任とよく話し合い、学校全体で取り組みを推進したいと考えています

若い先生方を育てる上では、良い点を認めた上で、「こうしたらもっと良くなる」とアドバイスしています。話しやすい関係を築くために、日頃から一緒に食事をするなどコミュニケーションを取ることも心掛けています。

教務主任 浅野和久先生